

開催地名	愛媛県 宇和島市
開催日時	令和6年12月3日(火)13:15～14:40
開催場所	津島中学校体育館
語り部	宮本 英一(千葉県旭市)
参加者	200名
開催経緯	大規模災害(東日本大震災など)における被災経験や現地での活動、テレビ等から得られる情報では伝わらない被災現場の状況や経験を知り、大規模災害時の備えの重要性を理解していただくことを目的に開催を希望。開催先を検討する中で、宇和島市立津島中学校が毎年地震津波避難訓練を実施しているが、地震津波災害の体験をした方も非常に少ないことから、体験談を聞くことで更なる防災意識向上を図りたいとの意向があったため、開催に至ったもの。
内容	■ はじめに 千葉県の北東部に位置する旭市は、平成17年7月に旭市、飯岡町、海上町、干潟町が合併して誕生し、現在の人口は約6万6,500人である。隣接する銚子市は醤油や漁業で知られ、旭市もまた農漁業を基盤とする町として発展してきた。 私は合併以前、飯岡町の職員を務めており、東日本大震災が発生した当時は地区長の立場にあった。震災では旭市において14名が犠牲となり、2名が行方不明となった。その多くは、一度目の津波の後に「避難は終わった」と判断し、自宅へ戻ったことで、次に押し寄せた二度目の津波による被害を受けた。 この経験を通じて、津波が繰り返し襲ってくる特性や、震源地から離れた千葉県でも甚大な被害が生じる可能性があることを、広く知ってもらいたいと考えている。 ■ 津波の脅威 過去に何度も「津波警報」や「注意報」が発令されていたが、九十九里浜は広大な海岸線を持つため、津波のエネルギーが拡散されやすく、比較的被害を受けにくいと考えられていた。そのため、私自身も「津波が堤防を越えることはないだろう」と高をくくっていた。しかし、東日本大震災で発生した津波は、これまでの認識を根底から覆すものとなった。 最初の津波は予想通り堤防を越えなかったものの、約1時間半後に押し寄せた二度目の津波は、堤防を乗り越えて町を水没させた。その瞬間、私と家族も逃げ遅れ、濁流に巻き込まれたが、偶然流れてきた屋根の残骸にしがみつくと九死に一生を得た。 二度目の津波が町を襲う直前、「大津波警報、緊急避難、緊急避難、団長命令」という防災無線の放送が繰り返し流れていた。その声を聞き、初めて「これはただ事ではない」と直感した。しかし、避難しなければと気づいた時にはすでに遅く、自宅の海岸側の壁が「バリバリ」と音を立てるとともに、濁流が押し寄せてきた。 その瞬間、私は「なぜもっと早く避難しなかったのか」と強く後悔した。津波の脅威を軽視し、これまでの経験則に頼ってしまったことで、自ら命の危機に晒される結果となったのである。 ■ 震災を通じた教訓 震災後、ボランティアの支援を受けるためには、被災者自身が手続きを行う必要があった。しかし、受付業務が煩雑で時間を要したため、支援の迅速性が損なわれる場面が多く見られた。また、移動手段が限られていたことで、支援活動の時間が制約されるという課題も浮き彫りとなった。 一方で、サーファーたちが「いつもこの海にお世話になっているから」と言い、自発的にボランティアの受付を通さず、現場で熱心に支援活動を行ってくれたことは心強かった。彼らの行動からは、制度や枠組みにとらわれない自発的な助け合いの重要性を改めて感じた。 この震災を通じて、私は改めて命の尊さを痛感した。人は誰も「自分だけは大丈夫」と思いがちである。しかし、実際には誰もが被災者となる可能性がある。だからこそ、災害時に自らを守る行動をとること、そして家族や地域住民を守るための準備をしておくことが不可欠である。 特に、津波には「繰り返し襲う」という特性がある。東日本大震災では、一度目の津波が引いた後に避難を終えたと判断し、家に戻ったことで犠牲となった人が多かった。このことから、「最初の波が小さいからといって安心しないこと」、「一度避難したら、完全に安全が確認されるまで戻らないこと」が、命を守るための鉄則であると強く感じた。

	■ まとめ 震災の教訓を踏まえ、私たちにできることは何か。それは、日頃から津波の特性や災害時の行動を学び、「いざ」という時に適切な判断ができるよう備えておくことである。 また、防災対策には「自助」「共助」「公助」の3つの柱があるが、特に災害発生直後は「自助」と「共助」が命を守る鍵となる。行政の支援はすぐには届かないため、自らの身を守る力(自助)と、地域で助け合う力(共助)が求められる。 さらに、ボランティア活動の受け入れ体制を整え、支援が円滑に行われるような仕組みを作ることも重要である。制度の枠にとらわれるのではなく、地域住民や外部の支援者が柔軟に動ける環境を整えることが、復興のスピードを高めることにつながる。 私は、津波の脅威を身をもって体験し、多くの尊い命が奪われた現実を忘れることはできない。この経験を風化させることなく、次の世代に伝え、未来の防災対策につなげていくことが、震災を生き延びた私たちの責務であると考えている。 最後に、ここにいる皆さんに伝えたい。「災害はいつ、どこで発生するかわからない。だからこそ、今すぐ防災について考え、行動に移してほしい」と。今の備えが、未来の命を守ることにつながる。  
開催地より	動画や写真を通して、当時の被害がわかり、津波の怖さを知った。 生徒達からも「今後の災害に備え、準備しなくてはならない」「家族と話し合いをしなくてはいけない」など感想をいただいた。